

川高2号遺跡

沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

2005

財団法人 広島県教育事業団

川高2号遺跡

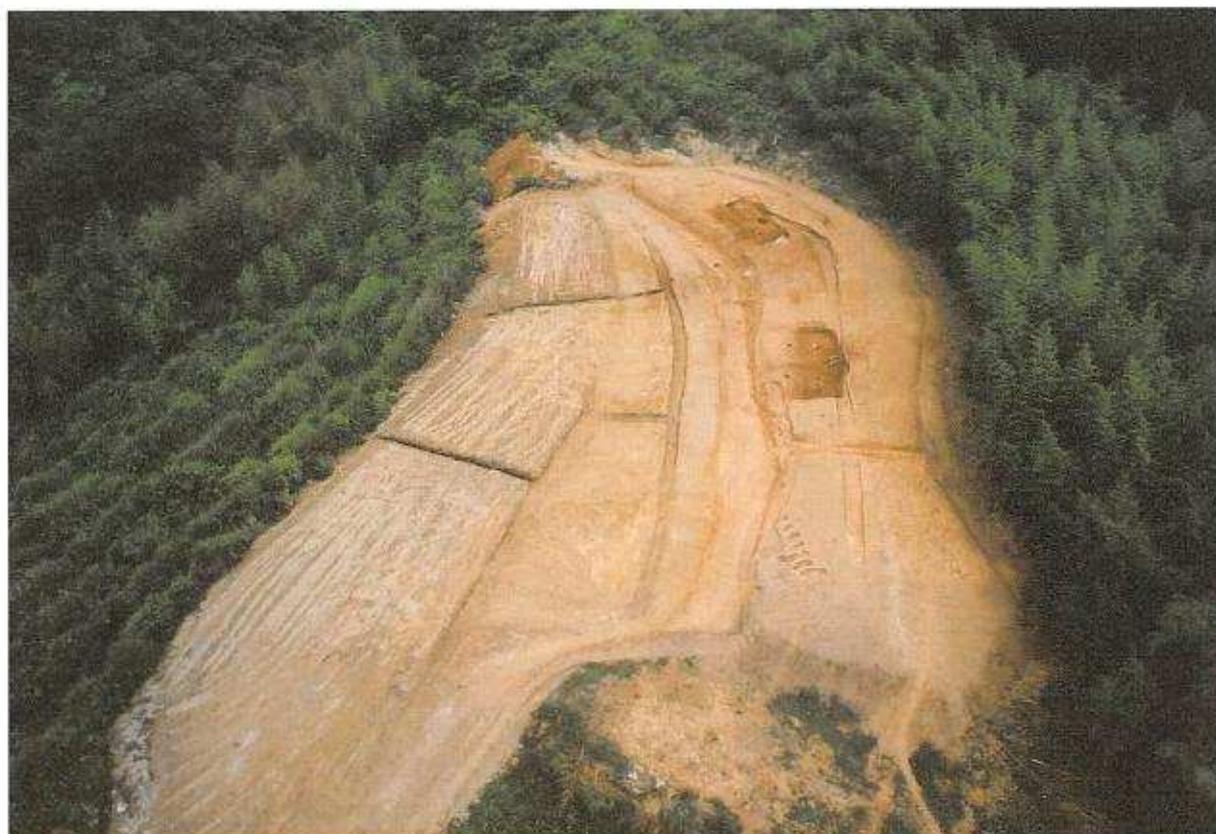
沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(4)



福富町位置図（●は遺跡の位置を示す）

2005

財団法人 広島県教育事業団



a 調査後遺跡遠景 (空中写真, 南から)



b SB2-1かまど断面状況 (南西から)

例 言

- 1 本報告書は平成16(2004)年度に調査を実施した沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る川高2号遺跡（東広島市福富町〈平成17年2月7日から。発掘調査当時は賀茂郡福富町〉大字久芳字平原所在）の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査は広島県東広島地域事務所との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
- 3 発掘調査は山田繁樹が担当した。
- 4 出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は、山田が中心となって行った。
- 5 本書の執筆は山田・岩本正二が行い、編集は岩本が担当した。
- 6 本書で使用した遺構の表示記号は次のとおりである。
SB：住居跡，SD：溝，SK：土坑，SX：その他の遺構
- 7 遺物実測図の断面は、土師器：白ヌキ，須恵器：黒ヌリとした。
- 8 図版と挿図の遺物番号は同じである。
- 9 本書で使用した方位は第1・2図を除いて、その他はすべて平面直角座標系（第Ⅲ系）座標北である。
- 10 第1図は国土地理院発行の1：25,000の地形図（乃美）を使用した。



遺跡見学会風景

本文目次

1	はじめに	(1)
2	位置と環境	(2)
3	調査の概要	(6)
4	遺構と遺物	(9)
5	まとめ	(20)

巻頭図版目次

- 巻頭図版 1 a 調査後遺跡遠景（空中写真，南から）
b SB2-1 かまど断面状況（南西から）

挿図目次

第1図	周辺主要遺跡分布図（1：25,000）	(3)
第2図	遺跡周辺地形図（1：2,500）	(7)
第3図	遺構配置図（1：200）	(8)
第4図	遺構配置断面図（1：200）	(9)
第5図	SB1実測図（1：60）	(10)
第6図	SB2-1かまど実測図（1：30）	(11)
第7図	SB2・SB3実測図（1：60）	(12)
第8図	SB2-2かまど実測図（1：30）	(13)
第9図	出土遺物実測図1（1：3）	(14)
第10図	出土遺物実測図2（1：3）	(16)
第11図	出土遺物実測図3（1：4）	(17)
第12図	SB4・SD4実測図（1：60）	(19)
第13図	SK1実測図（1：30）	(20)

図版目次

- 図版1 a 調査前遺跡遠景（南西から）
b 調査後遺跡遠景（空中写真，北から）
- 図版2 a 調査後遺跡遠景（空中写真，北西から）
b 調査後遺跡遠景（空中写真，西から）
- 図版3 a SB1完掘状況（南から）
b SB1完掘状況（南西から）
c SB2かまど遠景（北から）
- 図版4 a SB2遺物出土状況（南東から）
b SB2完掘状況（西から）
c SB2完掘状況（北西から）
- 図版5 a SB2-1かまど近景（西から）
b SB2-1かまど断面状況（南西から）
c SB2-2かまど近景（西から）
- 図版6 a SB2-2かまど断面状況（南西から）
b SB3近景（北西から）
c SB4近景（北西から）
- 図版7 a SD4近景（西から）
b SK1近景（南西から）
- 図版8 出土遺物1
- 図版9 出土遺物2
- 図版10 出土遺物3

1 はじめに

川高2号遺跡の調査は、沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係わるものである。

福富ダムは、二級河川沼田川水系沼田川の洪水調節及び既得取水の安定化、河川環境の保全と都市用水の供給を目的として、平成20年度の完成を目標に計画された多目的ダムである。本事業に係って、広島県東広島土木建築事務所（現広島県東広島地域事務所、以下「東広島事務所」という）は事業予定地内の文化財等の有無および取り扱いについて、平成5年11月4日付けで広島県教育委員会（以下県教委という）に協議した。県教委は平成12年9月20日付けと平成14年8月2日付けでダム水没地内に福原城跡を確認したほか、遺跡の有無を確認するための試掘調査が必要な箇所がある旨を回答した。

川高2号遺跡については、県教委が平成15年2月5日～7日に試掘調査を実施し、当該予定地に遺跡が存在していることを確認した。

この取り扱いについて県教委と福富町教育委員会及び東広島事務所の3者で協議を重ねたが、遺跡の現状保存は困難であるとの結論に達し、記録保存の処置をとることとなった。これを受けて東広島事務所は県教委に対し平成15年9月17日付けで文化財保護法第57条の3に基づく埋蔵文化財発掘の通知を行い、県教委は平成15年10月8日付けで工事着手に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。東広島事務所は、翌平成16年1月13日付けで財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室（以下「事業団」という）に発掘調査を依頼した。事業団ではこれを受けて6月18日付けで埋蔵文化財発掘調査の届出を県教委に提出した。東広島事務所と事業団は6月14日付けで委託契約を結び、6月21日～7月30日までの6週間にわたり発掘調査を実施した。

本書は以上のような経緯のもとに実施した発掘調査の成果をまとめたものである。今後の埋蔵文化財の資料として、また、当該地域の歴史の一端を知る助けとなれば幸いである。なお、発掘調査にあたっては、広島県東広島地域事務所、福富町教育委員会及び地元の方々から多大なるご協力を得た。記して感謝の意を表します。

2 位置と環境

川高2号遺跡は、東広島市福富町大字久芳字平原に所在する。

福富町は安芸高田市向原町と接して鷹の巣山（標高922m）、東広島市志和町に接して金明山（735m）・野路（段原）山（731m）、東広島市豊栄町に接して板鍋山（757m）といった700mを超える山々に囲まれている。こういった地勢から盆地状の地形となっており、谷あいを通る河川は合流を重ね沼田川となり北西から南東に向かって町内を貫流し、瀬戸内海（三原市）に注いでいる。また、源流域にあたるため、水源がそれほど豊かではなく、耕作地付近には灌漑用の溜池が大小を問わず数多く存在している。町の面積の内、森林と農用地で約90%となり、農林業が基幹産業となっている。

本遺跡は沼田川が竹仁地区から大きく南に流路を変え国道375号線沿いに南下している谷河内川と合流する地点を見下ろす南西側丘陵斜面に位置している。南西には福原城跡を望むことができ、南側谷間には緩やかな斜面に開墾された棚田状の水田がある。

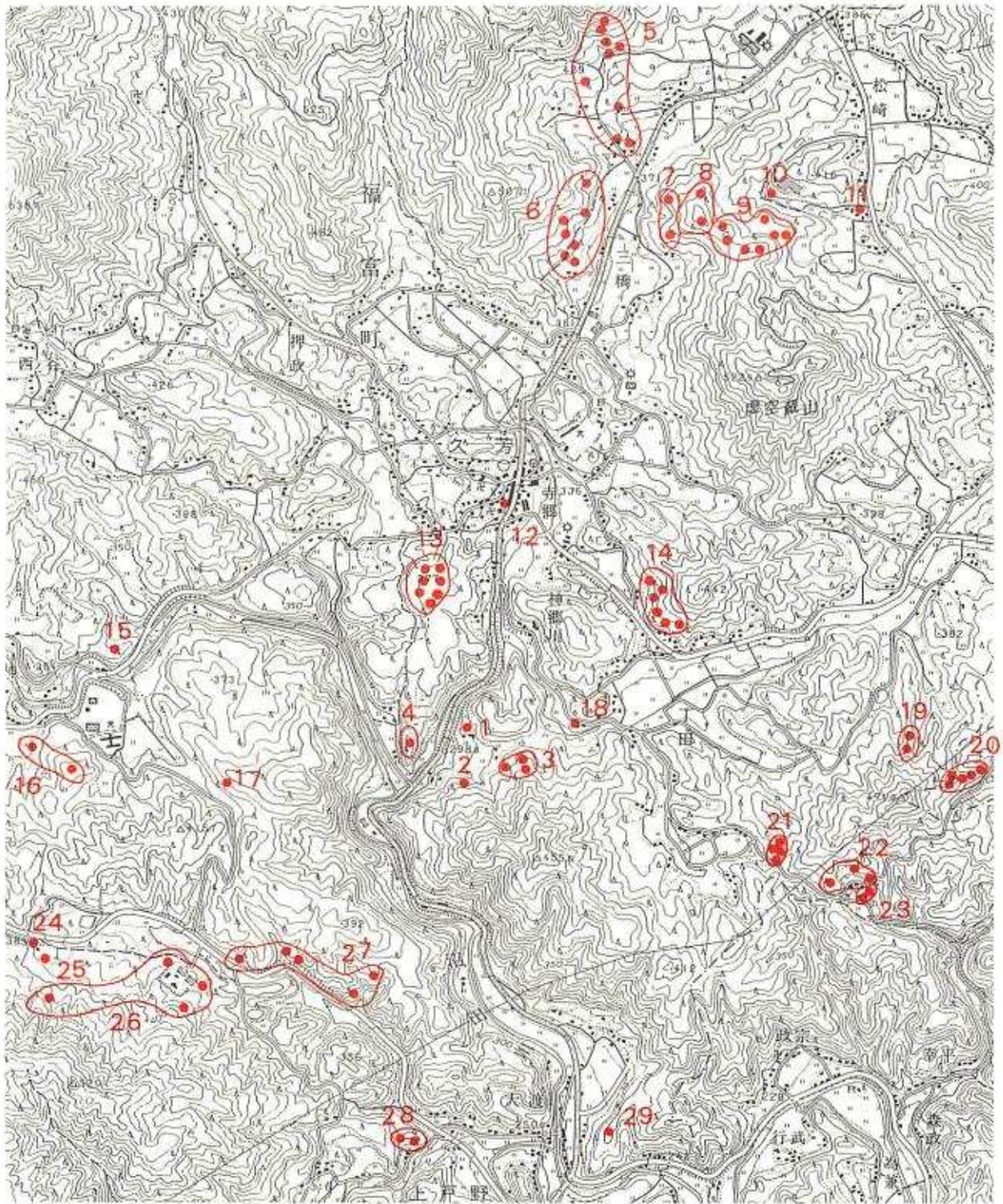
本遺跡周辺の歴史的な環境については、『広島県遺跡地図Ⅱ』⁽¹⁾やこれまで町内で行われた発掘調査の成果を参考にしながら古墳時代を中心に概観してみたい。

福富町内での遺跡分布状況はほとんどが古墳を中心とする墳墓であり、集落関連の遺跡は調査例が少なく不明の部分が多い。

旧石器時代の遺構や遺物は確認されていない。金口古墳群⁽²⁾（久芳）の調査は福富ダムに関連した金口地区総合開発事業にともなうもので、古墳以外に墳丘の基盤となっている包含層内から安山岩・流紋岩・黒曜石を石材とする縄文時代の石鏃・石錐・尖頭器・石匙などの石器類や剥片が41点出土している。形態や製作技術の状況から縄文時代でも比較的古い段階とされ、町内で最も古い遺物となり、集落遺跡の存在が想定される。

弥生時代になると明確な竪穴住居跡などは、確認されていないものの遺物の散布地などが数例あり、遺跡が増加しつつある様子がうかがえる。日曾木遺跡⁽³⁾（久芳）は、本事業に伴って調査が行われ、中期～後期にかけての竪穴住居跡2軒と段状遺構1基が確認されている。遺跡は福富中学校と沼田川を挟んだ北側の丘陵上の僅かな平坦面に立地し、1本柱という住居の上屋構造から非日常的な居住地であった可能性が指摘されている。他に十文字南1・2号遺跡（久芳）から石斧や土器片が出土しているほか、平が市遺跡（上竹仁）、正覚寺裏遺跡（久芳）などは土器の包含地として、竹仁遺跡（下竹仁）は遺物の出土と土坑が確認されている。

古墳時代の遺跡は古墳が中心となり、古墳の数は約80基、集落遺跡として3遺跡が確認されている。古墳はほとんどが横穴式石室を埋葬施設とする円墳で後期に属すると思われる。これらの古墳の内、下平古墳群（上戸野）は5基で構成される古墳群で石室石材が確認されておらず、特に第1号古墳は、町内唯一の前方後円墳（全長25m）であることから、他の古墳群より早く展開した可能性があり、埋葬施設として横穴式石室が導入される以前の古墳群のひとつとして注目される。上神古墳群（2基）（上戸野）のうち第1号古墳は箱式石棺が確認されている。松の木古



第1図 周辺主要遺跡分布図 (1:25,000)

- 1 川高2号遺跡 2 川高遺跡 3 平原古墳群 4 福原城跡 5 小松東古墳群 6 小松西古墳群
- 7 後谷古墳群 8 御子城古墳群 9 松崎古墳群 10 松崎ため池遺跡 11 松崎遺跡 12 正覚寺裏遺跡
- 13 金口古墳群 14 犬丸山古墳群 15 日曾木遺跡 16 二反田山古墳群 17 福富中学校裏古墳
- 18 民貞古墳 19 十文字古墳群 20 杉風呂山北古墳群 21 丁田南古墳群 22 十文字南古墳群
- 23 十文字南遺跡群 24 竹仁古墳 25 竹仁遺跡 26 西田河内古墳群 27 東田河内古墳群
- 28 松の木古墳群 29 貝峠古墳

墳群⁽⁴⁾（2基）（上戸野）は、報告によると平地からの比高が約60mの丘陵頂部の幅5～6m、長さ20mの平坦地に径8m、高さ0.6～0.8mの円墳1基と8基の箱式石棺と2基の石蓋土壙墓が明らかにされ、墓域内からの遺物は無く丘陵東側先端部で鉄刀・鉄鑿が1点出土している。遺跡地図と照合すると丘陵先端部が第1号古墳で、報告で松の木古墳とされているのは第2号古墳となる。丘陵の頂部平坦面を埋葬地として選定し、明確な墳丘がなく埋葬施設が密集している状況と箱式石棺の側石を横長に使用している状況をみると、近年、調査が進み状況が明らかになりつつある東広島市で多く確認されている弥生時代後期に属する墳墓群の特徴と類似しており、松の木古墳群は弥生時代後期の墳墓群であった可能性も考えられる。金口古墳群⁽²⁾（久芳）は、6世紀前半期を中心にした7基で構成される古墳群で、町役場などがある町並みの中心地から南にひろがる丘陵頂部の平坦地に営まれていた。古墳は径11mの第1号古墳が最大規模で、大半は径が4m～8mの古墳であり、箱式石棺と石蓋土坑を埋葬施設としている。出土品には須恵器や鉄剣・鉄鎌・摘鎌・「やりがんな」がある。これらの古墳は墳丘がほとんど残っておらず試掘時の石棺の確認により古墳の存在が明らかになっている。このような状況から町内には、横穴式石室でない前半期の古墳が未確認で存在している可能性は高いと思われる。

後期の古墳は直径10m、高さ2m程度の墳丘を持つ横穴式石室を埋葬施設とするものがほとんどで、久芳から豊栄町に至る道沿い、下戸野から竹仁に至る道沿いなど交通の要衝で谷間の平野部を見下ろす小高い場所や小さい谷の奥に築造されている。単独で存在する古墳は僅かでおおむね2基～10基程度で群を構成する例が多い。

丁田南古墳群⁽⁵⁾は4基の古墳で構成され、いずれも南東に開口する横穴式石室を埋葬施設としているが、石材はほとんど抜き取られていた。このうち、第3号古墳が発掘調査された。第3号古墳は、第1・2・4号古墳とは小さな谷を挟んで離れており丘陵先端部付近に立地している。墳丘はほとんど残っておらず、周溝から径7.5mの円墳であったことがわかる。石室は掘方底面から石材を広口積みにより構築され、玄室の幅と高さ（推定）は共に1m弱で、長さは残存長で4mの無袖式である。出土した須恵器から7世紀前半の築造とされている。福富中学校裏古墳⁽⁶⁾は本事業に伴って調査がされている。この古墳は急峻な丘陵斜面に単独で存在しており、墳形は長径約11m、短径が約9mの楕円形で、玄室の長さが6.6m、7.5m、幅1.6m、高さ1.9mの南西に開口する無袖式の横穴式石室を埋葬施設としている。石室入り口の左右には外護列石、墳丘上からは埋葬にともなう祭祀行為の痕跡と思われる須恵器・大甕が出土している。石室内からは原位置を保っていないものの須恵器・耳環・玉類、鉄器（馬具・飾り金具・鉄鎌・鎖尻金具・足金物）などの豊富な遺物が出土している。時期は6世紀後半から7世紀の初頭と報告されている。同時期の古墳としては規模が大きいことや単独で立地していること、豊富な副葬品から沼田川上流域のなかでも有力者層の被葬者を想定している。福富中学校裏古墳と同様に単独で存在する貝峠古墳⁽⁷⁾は、沼田川と支流の造賀川が合流する付近の北側丘陵頂部に立地している7世紀前半代の築造とされる古墳で、須恵器の鳥形瓶が出土している。また、丁田南古墳群の辺りからは環状瓶が出土したと伝えられている。これらの須恵器は異形須恵器と称され、沼田川中流域から上流

域を中心に分布がみられるもので、被葬者の埋葬時における祭祀の際に使用したと考えられている⁽⁷⁾。異形須恵器は朝鮮半島を中心に出土していることから、畿内でも半島に関わりのある有力豪族との結びつきを考える上で重要な資料となっている。

沼田川下流域の本郷町には、巨石を使用した6世紀後半期の梅木平古墳^{ばい き びら}、家形石棺がある御年^{みとし}代古墳、奈良県檜隈寺と同類の瓦が出土し7世紀中頃に建立されたとする本郷町横見廃寺などがあり、畿内の有力寺院や豪族の影響を強く受けている地域とされている。

集落遺跡は本遺跡以外に、川高遺跡⁽⁸⁾がある。川高2号遺跡のすぐ南で発掘調査した遺跡で、6世紀前半ごろの時期になる。竪穴住居跡1軒と溝などを検出している。また、松崎遺跡(久芳)で住居跡と思われる遺構と須恵器・土師器が出土している。他に、松崎ため池遺跡(久芳)では須恵器・土師器が工事中に出土しており、周辺には多くの古墳が分布している地域であることから大規模な集落遺跡が存在する可能性がある。また、遺物の包含地として正覚寺裏遺跡(久芳)、十文字南1・2号遺跡(久芳)、平が市遺跡(上竹仁)が確認されている。

なお、川高2号遺跡の西側丘陵の斜面には、平原第1～3号古墳^{へいばら}が存在する⁽⁹⁾。いずれも、横穴式石室墳で、円墳と思われる。

註

- (1) 広島県教育委員会『広島県遺跡地図Ⅱ』1994年
- (2) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『金口古墳群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第145集 1997年
- (3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『日曾木遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第208集 2003年
- (4) 潮見 浩「広島県賀茂郡松の木古墳」『日本考古学年報』10(昭和32年度) 日本考古学協会 1963年
- (5) 福富町教育委員会『丁田南第3号古墳』福富町教育委員会文化財調査報告書第1集 1994年
- (6) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『福富中学校裏古墳発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第192集 2001年
- (7) 河瀬正利「広島県出土の鳥形須恵器」『芸備古墳文化論考』芸備友の会 1985年
- (8) 財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室『川高遺跡』財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第7集 2004年
- (9) 註(8)に同じ。

3 調査の概要

川高2号遺跡は平成13年度に調査を実施した福原城跡に対峙する位置にあり、福原城跡の南側で沼田川と合流する支流の谷河内川に面した西側斜面に立地している。また、平成15年度に発掘調査を実施した川高遺跡からは、小さな谷を隔てた北側約230mの地点にある。

調査前は谷河内川に向かう西側丘陵裾部の階段状に造成した3段からなる水田・畑で、調査区内は耕作地造成時に削平を受けている。遺跡内の標高は約322.2m～326.8mで、調査区内で約4.6mの高低差があり、遺構は東から西へ傾斜する斜面に構築されている。

調査は試掘調査時の資料を基にして、表土を重機によって排土作業を実施した後に、人力による遺構検出作業と掘り下げ作業を行った。調査面積は1,006㎡である。調査区内の基本層序は、耕作土、床土、遺物包含層、遺構確認面となり、谷部にあたる部分では遺物包含層が約0.7m堆積していた。

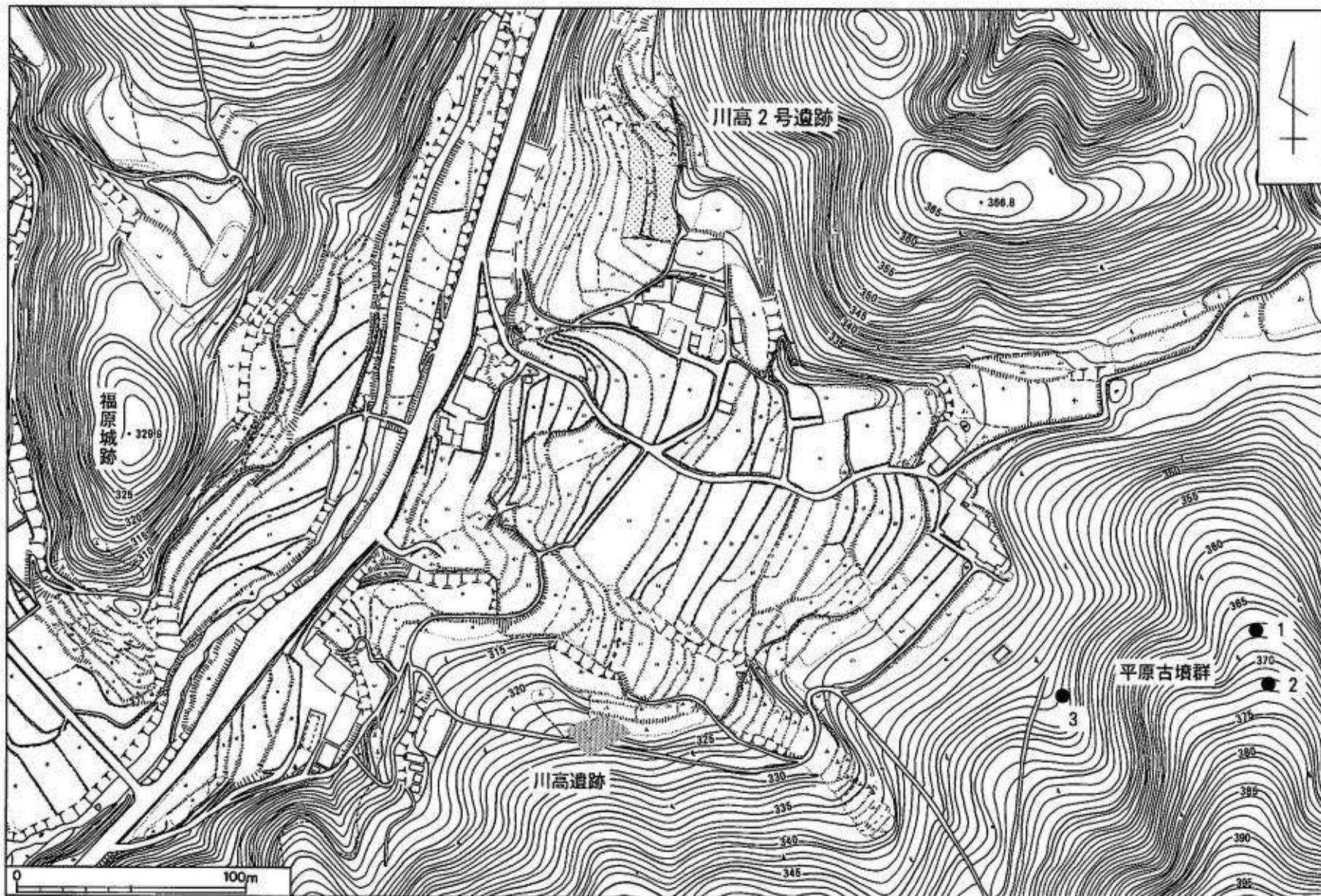
調査の結果、竪穴住居跡4軒、溝4条、土坑1基、その他の遺構（穴）6個を確認した。遺構は主に斜面上部の東側で検出した。

SB1は調査区東北部にあり、南北約6.7mの規模で東壁が残り、東西は約4m残存していた。床面で柱穴2個と炉1基を確認した。平面形はほぼ方形であったと思われる。SB2はSB2-1（新）とSB2-2（古）の2時期が存在する。SB2-2（古）は南北約5.6m、東西残存部3.7mの規模で、4個の柱穴を検出した。SB2-1（新）は、SB2-2（古）の北側に重複して作られており、南北約6.8m、東西残存部3.7mの規模で、4個の柱穴を検出した。新旧いずれも東側（山側）壁中央部に造り付けのかまどが存在していた。遺物は、特にSB2-1の床面付近で土師器がまとまって出土している。SB3はSB2の西側で確認したが、東側壁がわずかに残っているのみで、詳細は不明である。SB4はSB2の南にあり、東側壁が残存していた。残存南北規模が約6.7m、残存東西幅約1.4mで、詳細は不明である。これらの竪穴住居跡の時期は、古墳時代後半と推定される。

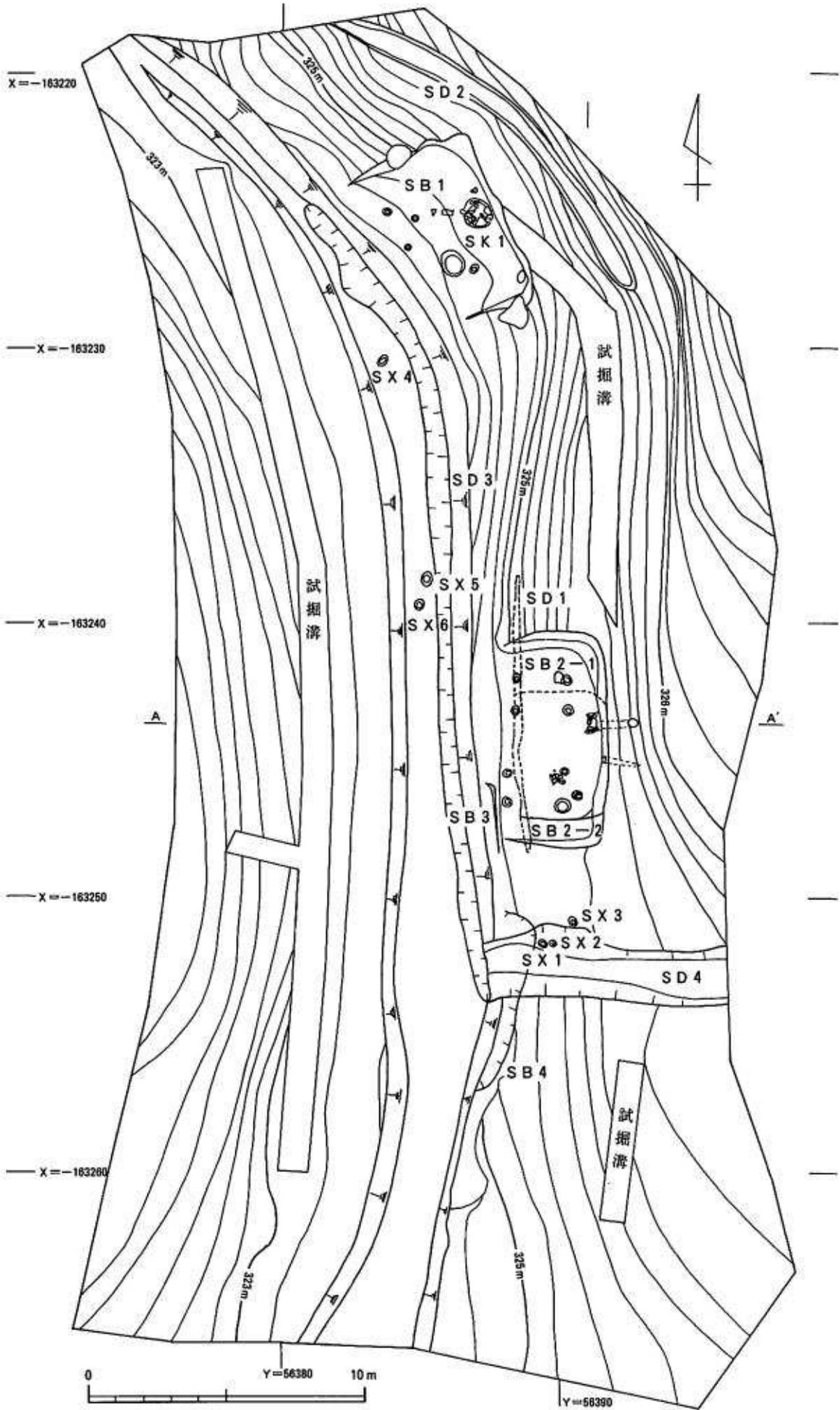
溝は4条あり、いずれも竪穴住居跡より上層で検出している。SD1・2・3は、等高線・斜面に対して並行している。SD4は斜面に直交しており、また、溝の埋土が褐色シルト質土で、他の溝とは相違する。溝の中では、古いものであろう。溝の時期は不明であるが、おそらく近世以降のものであろう。

SK1はSB1の上層にあり、径約1m、深さ0.55mの規模で、上部には径20cm前後の石が多量に存在した。壁面で桶の圧痕を確認しており、墓の可能性はある。時期は不明であるが、近世以降のものであろう。

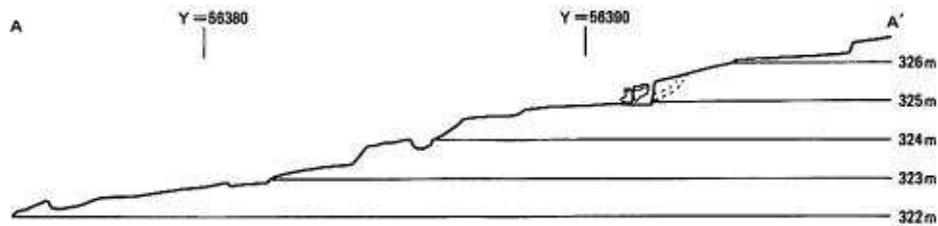
その他の遺構6個は、柱穴状の遺構で、時期は近世以降になる。



第2図 遺跡周辺地形図 (1 : 2,500)



第3圖 遺構配置図 (1 : 200)



第4図 遺構配置断面図（1：200）

4 遺構と遺物

SB1（第5図、図版3a・b）

調査区内の東北部に位置している。傾斜地に立地しているため斜面側は流出している。SB1の埋土は暗褐色土が中心で、遺構確認面の茶褐色土が混入している。

SB1は調査区東北部にあり、南北約6.7mの規模で壁が残り、東西は約4m残存していた。南北の両壁面には0.9～1.0m大の自然石があるが、住居跡に関連するかどうかは不明である。床面で柱穴2個と焼けた浅い土坑状のくぼみを確認した。住居跡の平面形はほぼ方形であったと思われる。壁溝は確認していない。東側の壁は高さ約0.7m分残存している。床面は東側と西側で約0.1mの高低差があり、西側が低くなっている。また、北側と南側で約0.1mの傾きがあり南が低くなっている。主柱穴は床面中央部で対角の位置に2個検出したが、残りの柱穴は確認できなかった。P1は径0.28×0.3m、深さ0.16m、P2は径0.2×0.36m、深さ0.21mである。もし仮に4本柱とすると、南北柱間3.3m、東西柱間1.5mになる。また、南部にある径約0.86×0.76m、深さ0.12mの浅い土坑状のくぼみは、壁面が焼けており、炉跡と考えられる。

遺物は埋土上層から土師器・甕、須恵器・杯身が出土している。

出土遺物（第10図14・18、図版9・10）

遺物は完形となるものが無く、反転復元し図化しているため数値は復元値で表している。

14は埋土上層から出土した土師器・甕で、口縁部は焼けて変色している。口径は（復元）20.8cm、胴部最大径25.0cm、残存高17.4cmである。口縁部が「く」字状に外反し、口縁端部は丸く終わり、胴部は長胴を呈している。体部外面は縦方向のハケ、口縁部から頸部はヨコナデ調整で、体部内面上部は斜め・横方向のケズリが施され、口縁部から頸部にかけてはナデ調整である。焼成は良好で、胎土は0.2～0.3mm大の砂粒が多く、色調は淡茶褐色～赤褐色である。18は上層から出土した須恵器・杯身で、短く外側上方に延びる受部に上方にたちあがりがあり、端部は尖り気味に収める。胎土は緻密であるが、焼成は生焼けで、内面の色調が淡赤褐色である。受部径（復元）11.8cm。現存高2.0cmである。

SB 2 (第6～8図、図版3c・4・5・6a)

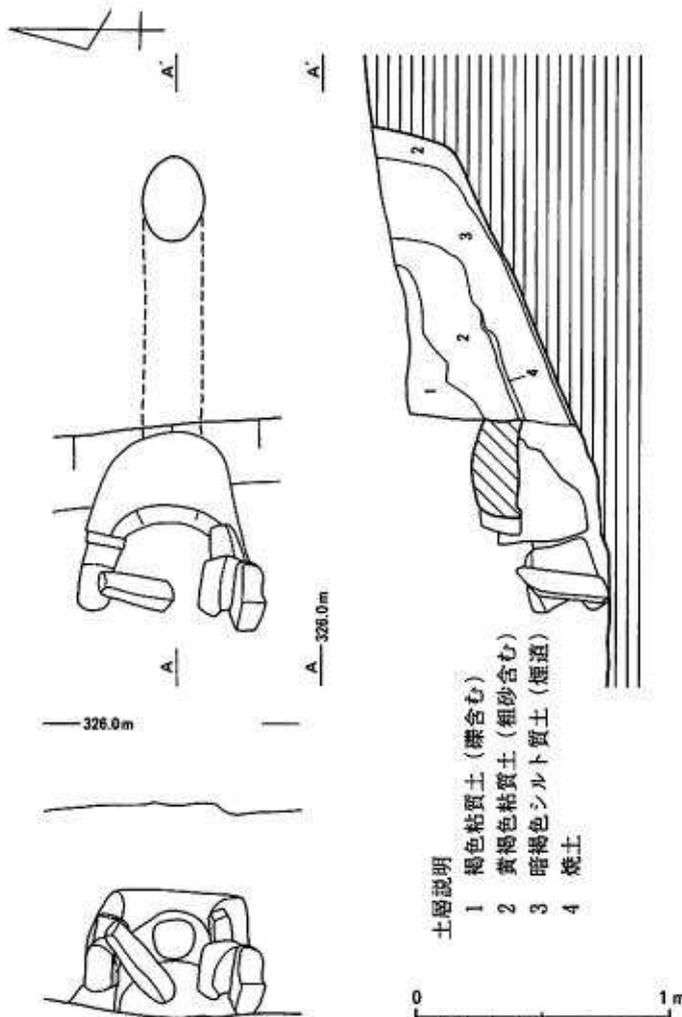
調査区内の東中央部に位置している。傾斜地に立地しているため斜面側は流出している。SB 2はSB 2-1(新)とSB 2-2(古)の2時期存在する。2時期重なっているが、規模がよく似通っており、柱間寸法が南北3.4m前後、東西1.9m前後とほぼ同一規格であることから、建替えたものと考えられる。

SB 2-1(新)は、SB 2-2(古)の北側に重複して作られており、南北約6.8m、東西残存部3.7mの規模で、4個の支柱穴を検出した。また、かまどの南で粘質土を使用した貼床が部分的に認められた。床面直上には、ほぼ全面に焼土層が認められるので、家屋は焼失したと考えられる。支柱穴の規模は、P 1は径0.28×0.3m、深さ0.53m、P 2は径0.38×0.33m、深さ0.53m、P 3は径0.32×0.3m、深さ0.5m、P 4は径0.27×0.28m、深さ0.54mである。柱間はP 1-P 2は1.85m、P 2-P 4は3.3m、P 4-P 3は2.05m、P 3-P 1は3.4mである。平面形はほぼ方形であったと思われる。壁溝は確認していない。東側の壁は高さ約0.55m残存している。

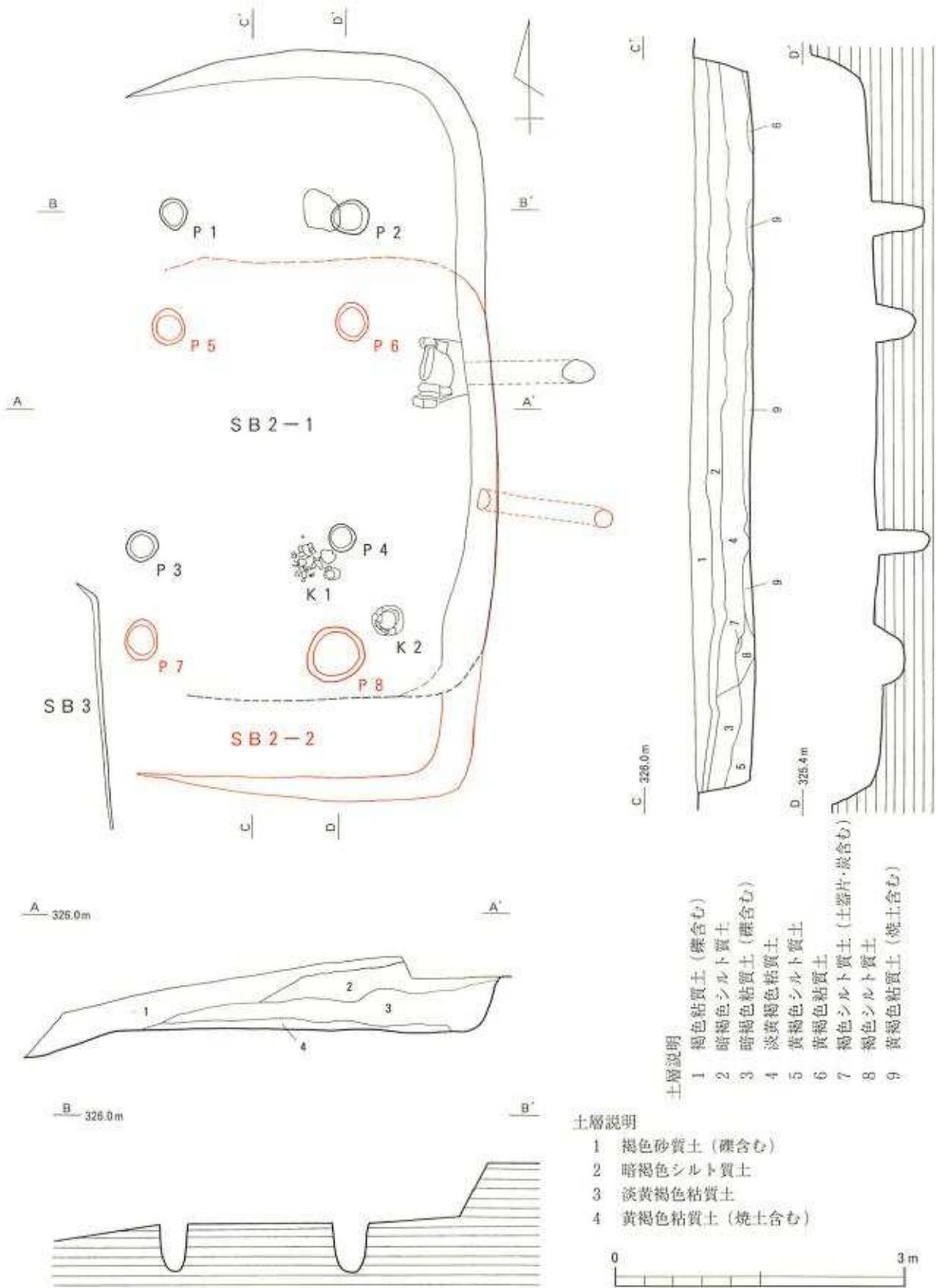
床面は全面ほぼ水平である。

造り付けかまどが東の壁の中央部に構築されている。かまどの焚口には石を使用した袖部があり、幅約0.5m、残存高さ約0.38mである。袖部の石は、北側の石が長さ28cm、幅12cm、高さ25cm、南側の石は長さ約30cm、幅12cm、高さ27cmの石を使用し、粘土を貼り付けている。天井部も石が存在していたと思われ、天井石と考えられる石が落ち込んでいた。燃焼部は長さ0.55m、幅約0.4m、高さ約0.3mで、煙道まではほぼ平坦である。煙道は基盤層を刳り貫いてトンネル状になっている。煙道の全長約1.2m、幅約0.2m、高さ0.2mあり、燃焼部から角度22度で傾斜して伸び、その後、角度68度で立ち上がり、煙道出口に至る。煙道出口は径0.2×0.3mである。

土師器・甕が煙道の出口付近から中央部にかけての場所から出土している。また、土器が床面の2箇所(K 1, K 2)から集中して出土したが、K 2の箇所は土師器・甕が立った状態で出土した。



第6図 SB 2-1 かまど実測図 (1:30)



第7図 SB2 · SB3実測図 (1:60)

SB2-2(古)は南北約5.6m、東西残存部3.7mの規模で、床面で4個の支柱穴を検出した。

支柱穴の規模は、P5は径0.32×0.32m、深さ0.35m、P6は径0.32×0.38m、深さ0.39m、P7は径0.34×0.4m、深さ0.3m、P8は径0.58×0.56m、深さ0.23mである。柱間はP5-P6は1.9m、P6-P8は3.5m、P8-P7は2.0m、P7-P5は3.25mである。平面形はほぼ方形であったと思われる。

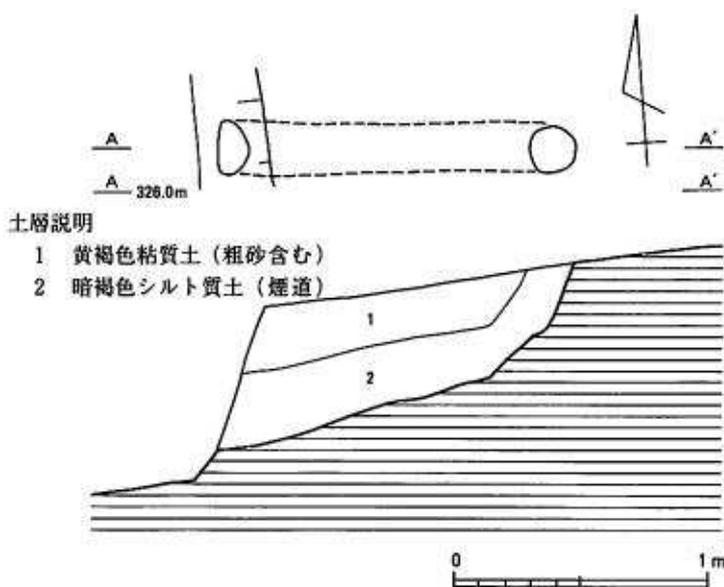
壁溝は確認していない。東側の

壁は高さ約0.3m残存している。床面は全面ほぼ水平である。造り付けかまどが東壁の中央部北寄りに構築されている。焚口・燃烧部は削平されており、煙道部のみを検出した。煙道は基盤層を削り貫いてトンネル状になっている。煙道の残存全長約1.3m、幅約0.18m、残存高約0.25mあり、燃烧部から角度約20度、その後急角度で立ち上がる。煙道出口は削平のため不明である。

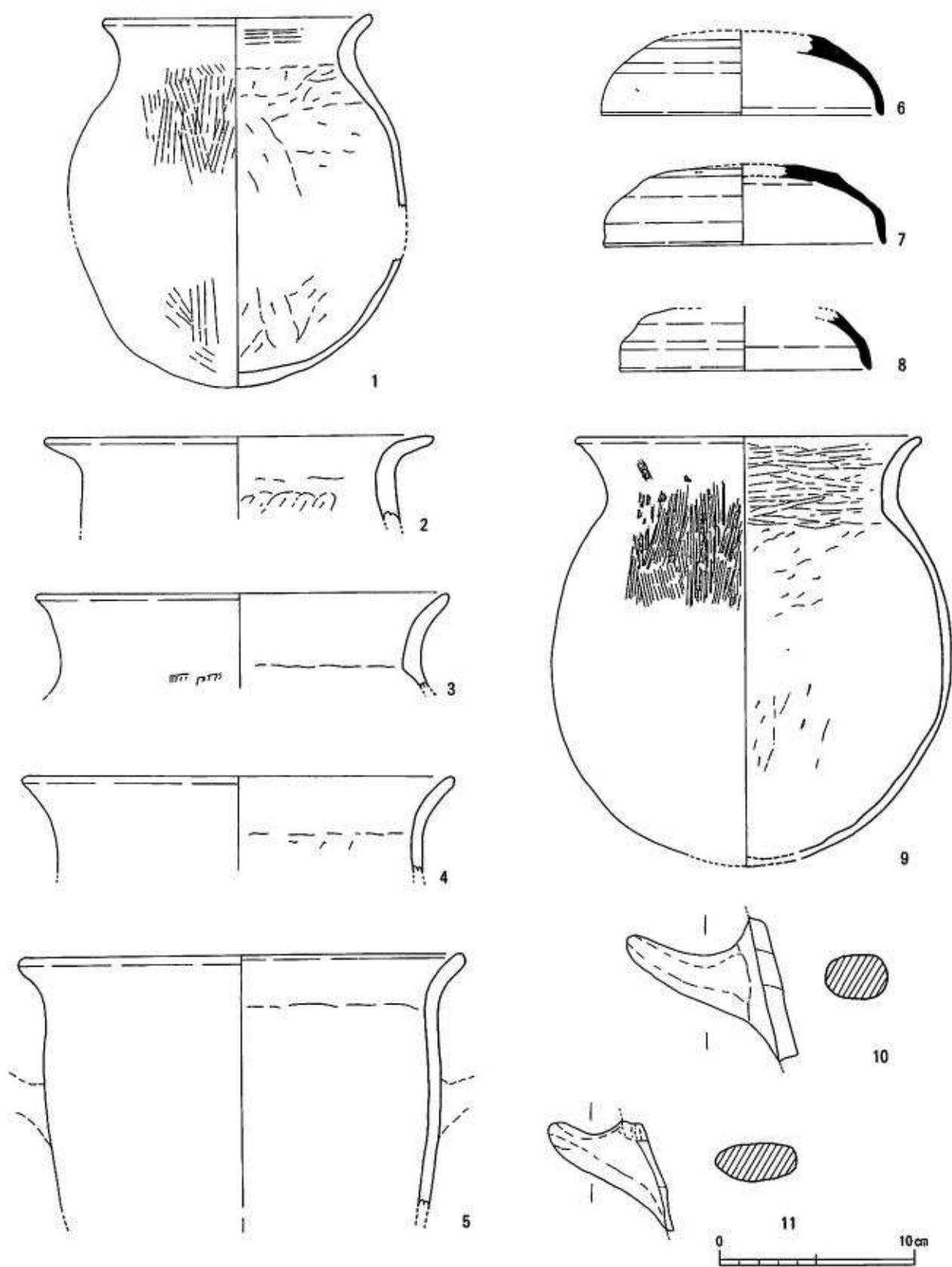
なお、SB2から土師器・須恵器が出土したが、ほとんどはSB2-1(新)からの出土である。

出土遺物(第9~11図、図版8・9・10)

1はSB2-1(新)床面土器群(K1)から出土した土師器・甕。口径13.8cm、高さ19cm、胴部最大径17.4cmで、口縁部が「く」字状に外反し、口縁端部は丸く終わる。体部の器壁は薄く、球形であるが長胴を呈し、丸底になる。底部の厚さは4mmある。胴部外面は目の粗いハケ、口縁部はヨコナデ調整で、内面は底部から胴部上部にかけては斜め方向のヘラケズリ、頸部付近は横方向のヘラケズリを施す。口縁部内面はヨコナデの後にハケ調整している。焼成は良好で、胎土は1mm大の砂粒が多く、色調は黒灰色~赤褐色である。2はSB2-1(新)埋土から出土した土師器・甕の口縁部で、口径(復元)20cm、残存高4.2cmである。口縁部が「く」字状に大きく外反し、口縁端部は丸く終わるが、わずかな端面がある。胴部の外面調整は荒れて観察できない。内面はヘラケズリがみられる。焼成は良好で、胎土は1mm大の砂粒が多い。色調は黒灰色~赤褐色である。3はSB2-1(新)床面土器群(K1)から出土した土師器・甕(甕?)の口縁部である。口径(復元)11.4cm、残存高4.8cmある。口縁部が「く」字状に外反し、口縁端部は丸く終わる。胴部の外面は目の荒いハケ調整で、内面はヘラケズリがみられる。口縁部は内外面ともヨコナデ調整。焼成は良好で、色調は淡黄褐色である。4はSB2-1(新)床面上の焼土層直

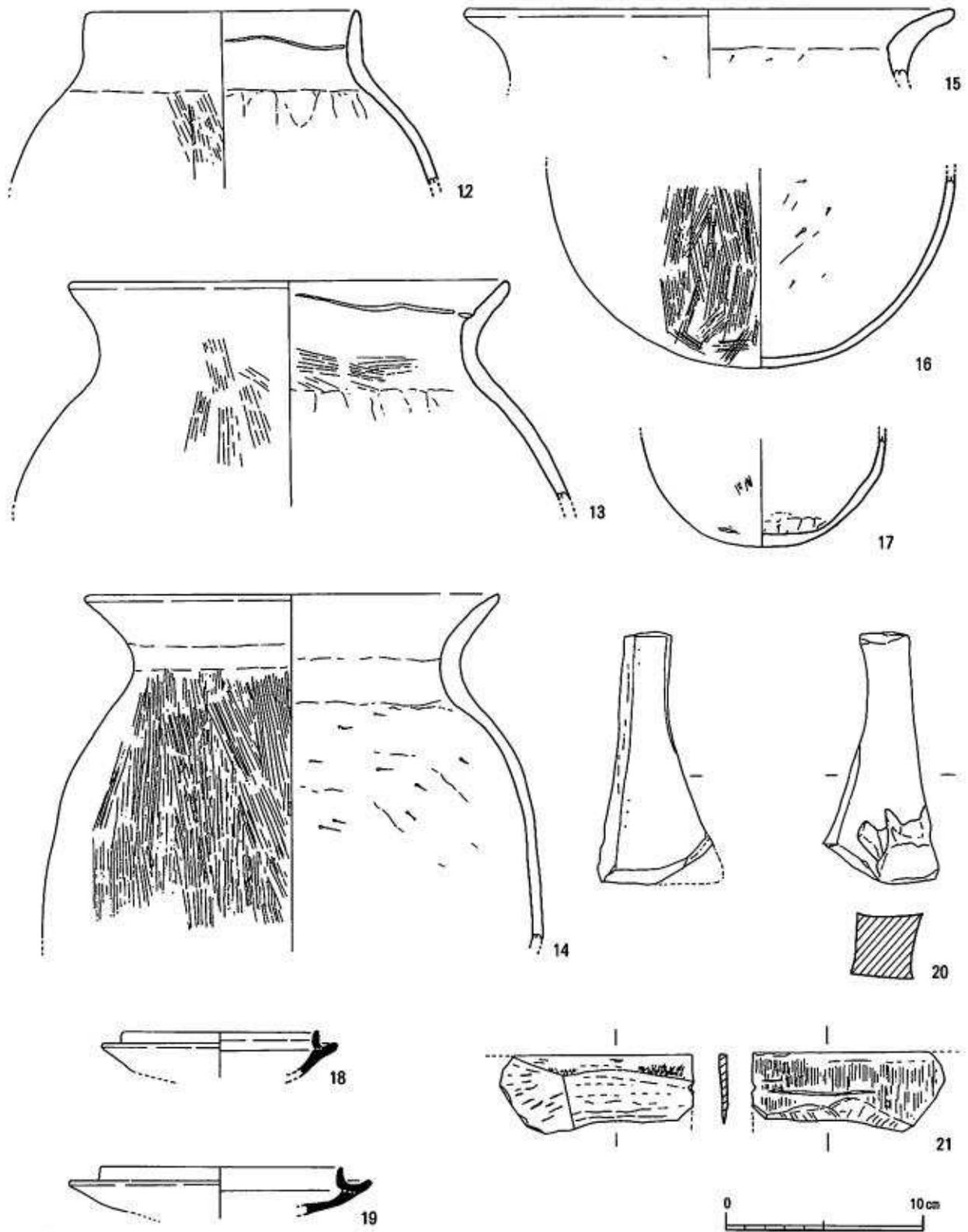


第8図 SB2-2かまど実測図(1:30)



第9圖 出土遺物実測図1 (1:3)

上から出土した土師器・甌の口縁部である。口径（復元）22.3cm，残存高4.9cmである。口縁部が「く」字状に外反し，口縁端部は丸く終わる。外面の調整は不明であるが，内面はヘラケズリ，口縁部はヨコナデ調整である。焼成は良好で，胎土は1mm大の砂粒が多い。色調は淡黄褐色である。5はSB2-1（新）床面土器群（K1）から出土した土師器・甌で，取手は脱落している。口径（復元）23cm，残存高13.1cm，胴部径21.4cmである。口縁部が「く」字状に外反し，口縁端部は丸く終わり，胴部は筒状になり，ふくらみはない。外面の調整は不明である。内面はヘラケズリ，口縁部はヨコナデ調整である。焼成は良好で，胎土は1mm大の砂粒が多い。色調は淡黄褐色である。6はSB2-1（新）床面上の焼土層直上から出土した須恵器・杯蓋である。口径（復元）14.4cm，高さ（復元）4.4cmある。外面の天井部はヘラケズリ，口縁部はヨコナデ調整である。天井部から口縁部に至る境目の稜は目立たず，カーブもゆるく，口縁部のナデも弱い。口縁端部は尖り気味に終わる。焼成は良好で，色調は青灰色である。7はSB2-2（古）の柱穴（P5）から出土した須恵器・杯蓋である。口径（復元）14.4cm，高さ（復元）4.2cmある。外面の天井部はヘラケズリ，口縁部はヨコナデ調整で，天井部から口縁部に至るカーブは6に比べればきつい。口縁端は尖り気味に終わる。焼成は良好で，胎土に0.5mm大の白色砂粒が目立つ。色調は淡青灰色である。8はSB2-1（新）床面土器群（K1）から出土した須恵器・杯蓋である。口径（復元）13.0cm，現存高3.0cmある。口縁部はヨコナデ調整で，焼成は良好であるがやや甘く，色調は外面が淡青灰色，内面が淡黄褐色である。9はSB2-1（新）床面土器群（K1）から出土した土師器・甕である。口径は（復元）16.2～17.6cm，高22.3cm，胴部径20.7cmである。口縁部は「く」字状に外反し，口縁端部は丸く終わるが，わずかな端面がある。体部の器壁は薄く，球形であるが長胴を呈し，丸底になる。口縁部はヨコナデ，胴部外面は縦方向のハケ調整で，内面調整は胴部下半部分は縦方向のヘラケズリ，上部分は斜め方向のヘラケズリ，口縁部付近はヨコナデである。外面下半部は熱を受け摩滅が激しい。焼成は良好で，胎土は1mm大の砂粒が多い。色調は暗茶褐色～赤褐色である。10はSB2-1（新）北部埋土から出土した土師器・甌の取手である。先端は尖り気味で牛角状を呈しており，貼り付け式か差し込み式かは不明である，外面調整は荒れて不明である。焼成は良好で，胎土は1mm大の砂粒が多い。色調は淡黄褐色である。取手の長さ8cm，径2.2～3.2cmで，胴部径（復元）21.4cmである。11はSB2-1（新）の柱穴（P3）内から出土した土師器・甌の取手である。差し込み式で，先端は丸くなり舌状を呈しており，煤がついている。外面調整は荒れて不明であるが，ナデ調整であろうか。焼成は良好で，胎土に砂粒は目立たない。色調は淡茶褐色である。長さ5.7cm，径2.0～4.2cmで，胴部径（復元）21.4cmである。12はSB2-1（新）かまど焚口部から出土した土師器・甕である。口径は（復元）13.7cm，胴部径21.4cm，残存高9.0cmである。口縁部は直立し，肩がある。口縁端部は丸く終わる。外面は縦方向のハケ，口縁部はヨコナデ，内面胴部上部分はナデ調整で，指頭による整形痕跡が残る。口縁部内面に横方向のヘラ状工具による刻線がある。焼成は良好で，胎土は0.5mm以下の砂粒が多い。色調は暗黄褐色である。13はSB2-1（新）のかまど煙道部内から出土した土師器・甕である。口径は（復元）22.0cm，胴部径27.8cm，残存高11.0cmである。口縁



第10图 出土遗物实测图2 (1:3)

部は「く」字状に外反し、口縁端部は丸く終わる。外面は縦方向のハケ、口縁部はヨコナデ、内面胴部上部分はハケの後ナデ調整で、指頭による整形痕跡が残る。口縁部内面に横方向のヘラ状工具による刻線がある。焼成は良好で、胎土は0.5mm以下の砂粒が多い。色調は黄褐色である。

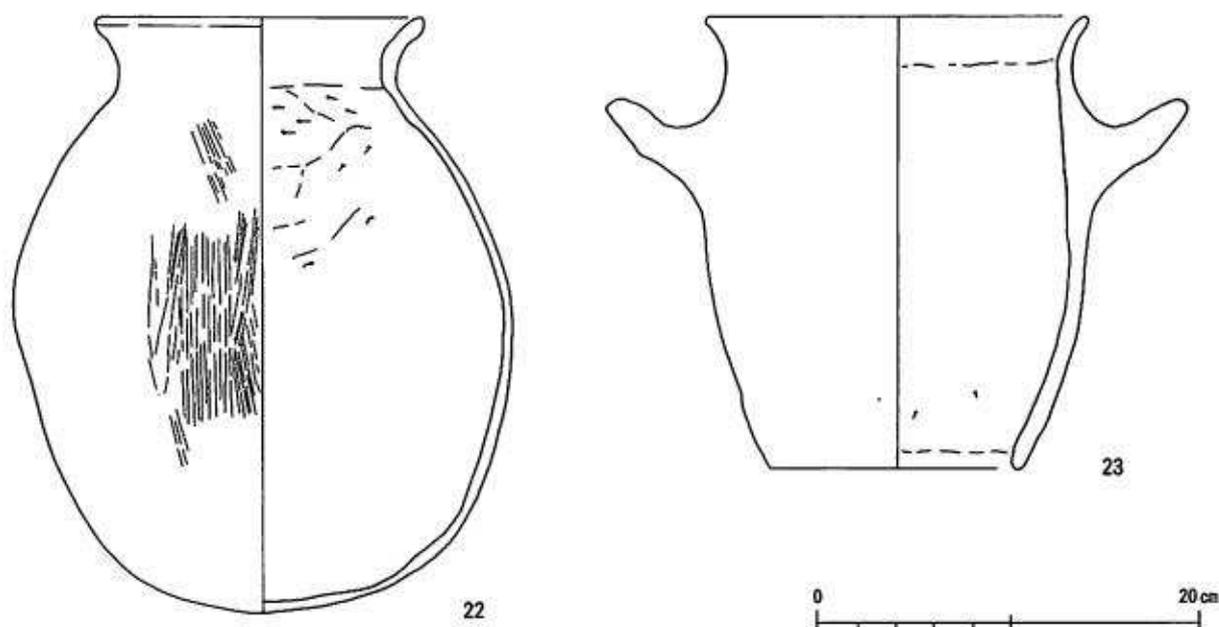
15はSB2-1(新)の東部床面から出土した土師器・甕である。口径は(復元)24.5cm、残存高3.2cm、口縁部は「く」字状に大きく外反し、器壁はやや厚く、口縁端部は丸く終わる。外面調整は荒れて不明である。内面胴部上部分はヘラケズリ、口縁部はヨコナデ調整である。焼成は良好で、色調は淡黄褐色である。

16はSB2-1(新)床面土器群(K1)から出土した土師器・甕の底部で、丸底である。残存胴部径(復元)は20.3cm、残存高9.5cmである。外面は縦ハケ、内面底部はヘラケズリ調整である。焼成は良好で、色調は淡赤褐色、胎土は1~2mmの砂粒が多い。

17はSB2-1(新)床面土器群(K1)から出土した土師器・甕の底部で、丸底である。残存胴部径(復元)は12.2cm、残存高5.5cmである。火を受け外表面が剥離している。外面は縦ハケ、内面底部はていねいなデ調整である。底に指頭による整形の痕跡が残る。焼成は良好で、色調は淡赤褐色、胎土は0.5mm以下の砂粒が多い。

20はSB2-1(新)の南部埋土下層から出土した砥石である。石材は安山岩系統、四角柱状で、長辺の4面を使用している。両端が欠けているが、現存の長さ12.5cm、幅2.0~4.7cm、厚さ2.8~3.1mmである。

22はSB2-1(新)床面(K2)から出土した土師器・甕である。口径15.7cm、胴部最大径26.0cm、器高31.5cmである。口縁部は「く」字状に外反し、口縁端部は丸く終わるが、わずかな端面がある。胴部の器壁は薄く、胴部は膨らむが長胴を呈し、丸底になる。胴部の器壁厚は4~5mmである。口縁部はヨコナデ、外面は縦方向のハケ、内面はヘラケズリ調整である。火を受け、特に胴部下半部には煤が付着してい



第11図 出土遺物実測図3 (1:4)

る。焼成は良好で、胎土は1mm程度の砂粒が多く、色調は淡黄褐色～赤褐色である。住居床面で立った状態で出土した。23はSB2-1(新)の南部床面の焼土層から出土した土師器・甌である。取手が対称的位置に2個付く。口径(復元)9.8cm, 胴部20.2cm, 器高23.7cm, 底部穴部径13cmである。口縁部は「く」字状に外反し、口縁端部は丸く終わる。胴部は取手の取り付け部がやや膨らんだ形になり、底部の端部は丸く終わる。器壁の厚さは甕に比べて厚く、胴部下半の器壁厚は9mmある。内・外面とも荒れており調整は不明であるが、外面に部分的にナデが残り、内面の口縁部付近の調整はヨコナデである。取手は先端が尖り気味で牛角状を呈している。おそらく貼り付け式であろう。焼成は良好で、胎土は2mm程度の砂粒が多く含まれ、色調は淡黄褐色である。

SB3(第7図, 図版6b)

SB3はSB2の西側で確認した。東側壁がわずかに残っているのみであるが、平面形はおそらく方形であろう。東壁が約2.5m, 壁高約0.2m分残存していた。東側にあるSB2より古いが、南にあるSB4との重複関係や新旧関係は不明である。

出土遺物(第10図19, 図版10)

19はSB3の埋土から出土した須恵器・杯身である。短く外側上方に延びる受部に内側上方にたちあがりがあり、端部は尖り気味に収める。口縁部はヨコナデ調整である。焼成は良好で、胎土は緻密であり、色調は青灰色である。受部径(復元)15.0cm, 現存高2.3cmである。

SB4(第12図, 図版6c)

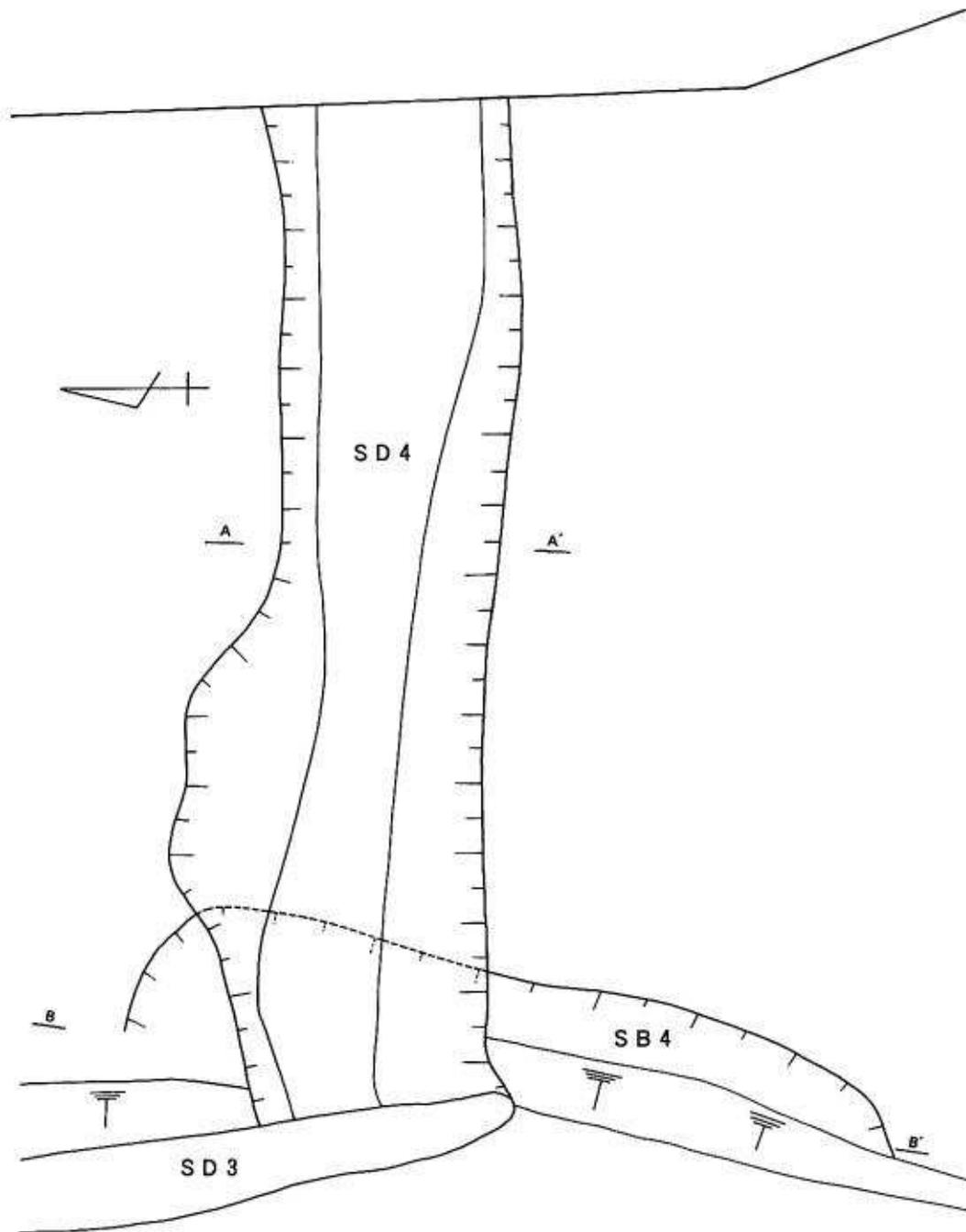
SB4はSB2の南にあり、東側壁が残存していた。平面形は方形であろう。残存南北規模が約6.7m, 残存東西幅約1.4m, 東壁の残存高0.3mである。北部はSD4と重複しているが、SB4はSD4の下層にある。遺物は出土していない。

SD1~4(第3図・第12図, 図版7a)

SD1は調査区中央部, SB2の上層で検出した南北溝で、長さ10m, 幅0.2~0.4m, 深さ約0.1mである。SD2は調査区東北隅にある南北溝で、長さ14.5m分確認した。北西で発掘区外に伸びる。幅0.6~0.9m, 深さ0.2~0.3mである。SD3は調査区中央にある南北溝で、長さ30.2m, 幅0.5~1.2mである。SD3は南端部でSD4と重複しているが、SD3が新しい。SD4は調査区東南部にある東西溝で、東は発掘外に伸び、西はSD3と重複しており、また削平を受けて西部は不明である。確認した長さ8.8m, 幅1.8~2.7m, 深さ0.2mである。溝はいずれも竪穴住居跡より上層で検出している。SD1・2・3は、等高線・斜面に対して並行しており、SD4は斜面に直交している。また、SD4の埋土は褐色粘質土で、他の溝とは相違する。SD4はSD3よりも切り合い関係から古いので、SD4は溝の中では古いものであろう。いずれの溝からも遺物は出土しておらず溝の時期は不明であるが、おそらく近世以降のものであろう。溝はいずれも地形に制約を受けていることから、古い水田など耕作に関係した遺構の可能性はある。

SK1(第13図, 図版7b)

SK1は調査区東北部にあり、SB1を掘り込んで作っている。径約1m, 深さ0.55mの円形の穴で、底から約0.5m上には人頭大の石が10数個存在した。また、土坑壁面には桶の側板痕跡



土層説明

- 1 褐色シルト質土 (礫含む)
- 2 黄褐色シルト質土
- 3 褐色粘質土

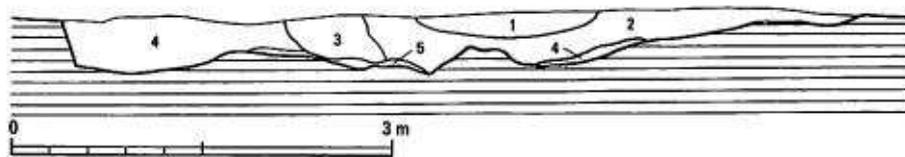


土層説明

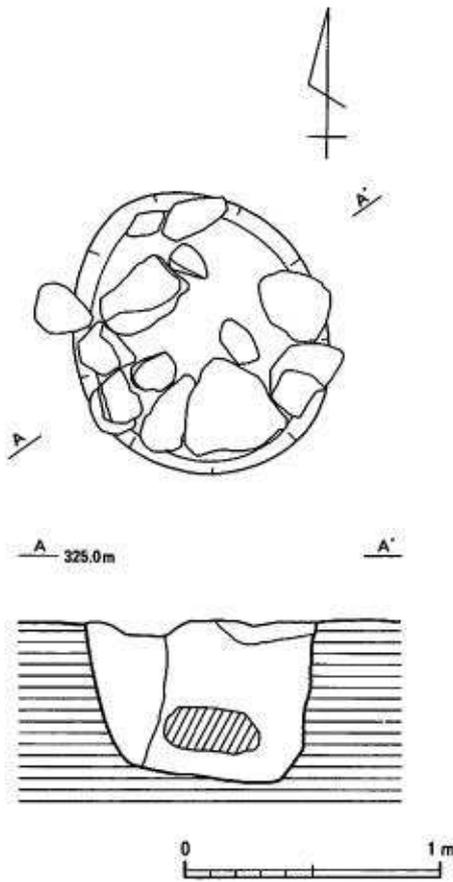
- 1 褐色シルト質土 (礫含む)
- 2 暗褐色シルト質土 (やや明るい)
- 3 暗褐色シルト質土 (礫含む)
- 4 暗褐色シルト質土
- 5 黒褐色シルト質土

B 326.0m

B'



第12図 SB 4・SD 4 実測図 (1:60)



第13図 SK1実測図(1:30)

が残っており、底付近に板状の石が存在していたことなどから、遺物や人骨などは出土していないが、墓の可能性はある。時期は不明であるが、おそらく近世以降のものであろう。

SX1～6(第3図)

SX1～6は小規模な穴である。SX1～3は調査区南東部にあり、SD4の上層で検出した。径0.2～0.3m、深さ0.2mの円形の穴である。SX4～6は調査区中央にあり、SD3南北溝の西側で検出した。径0.4m前後、深さ0.2mのほぼ円形の穴である。いずれも柱穴にはならず性格は不明である。SX1～3はSD4より新しく、SX4～6の埋土はSD3の埋土と同じであり、時期はおそらく近世以降であろう。

包含層出土の遺物(第10図21、図版10)

21は耕作土を除去した面から出土した剥片で、砥石の可能性はある。石材は安山岩系統で、長さ9.7cm、幅3.9cm以上、厚さ4mmである。

5 ま と め

川高2号遺跡では、調査の結果、竪穴住居跡4軒、溝4条、土坑1基、その他の遺構(穴)6個を確認した。出土遺物などから、竪穴住居跡は古墳時代後半の時期に推定できる。また、溝、土坑、その他の遺構は、遺物が出土していないが、土層の状況などから近世以降の時期と考えられる。ここでは、出土した遺物を検討して竪穴住居跡の時期を推定し、造り付けかまどのある竪穴住居跡(SB2)を中心に遺構について若干の検討を加えてみたい。

遺構の時期については出土遺物が手がかりになるので、遺物を検討する。今回の調査で出土した遺物で図化できたのは、主にSB1・SB2から出土しているものである。特に時期の指標となる須恵器で検討してみよう。6と8(第9図)は須恵器・杯蓋であるが、破片なので正確ではないが、推定口径が13～14.4cmであり、天井部から口縁部にかけては明確な稜がない。全体としては田辺編年のTK209～TK217¹¹⁾に相当すると推定できる。7(第9図)の須恵器・杯蓋は6や8に比べて、天井部と口縁部かけてのカーブがやや急で、古い要素があり、TK209相当と考えられる。18と19(第10図)は須恵器・杯身であり、口径や受け部のたちあがり小さく、同じ

くTK209～TK217に相当する。6はSB2-1の床面直上にある焼土層の上面から、8はSB2-1の土器群(K1)から、7はSB2-2の主柱穴埋土から出土しており、遺構の年代を示すものである。18と19については、18はSB1の埋土上層、19はSB3の埋土から出土しており、床面などの確実な遺構からの出土ではないが、状況的には時期を示すものである。須恵器の特徴から見れば、SB1・SB2・SB3は、TK209～TK217相当で、これまでの年代観では7世紀前半頃になる⁽²⁾。なかでは、SB2-2が須恵器の特徴からもSB2-1より古い、その差は小さいと思われる。

以上のように、SB1・SB2・SB3は、7世紀前半頃の時期になる。SB4は出土遺物が存在しないが、平面形は方形であり、同時期と考えられる。

川高2号遺跡の竪穴住居跡のうち、構造が判明しているSB1とSB2について検討してみたい。SB1とSB2はほぼ同時期であり、かまどをもたないSB1と造り付けかまどをもつSB2が並存することになる。SB1とSB2の棟方向は等高線に平行している。これは斜面に建物を建てる際には、山側を削平し谷側を埋めて平坦面を確保する関係で、構造的にこの方が強い。斜面に建物を建てる方法としては、理にかなった方法であろう。

SB2は2時期存在する。いずれも造り付けかまどがある。かまどの位置は山側の壁の中央付近にあり、SB2-1(新)のかまどには粘土で包まれた袖石があり、トンネルを穿って建物外に煙を排出する構造である。SB2-2(古)のかまども同様な構造であるが、袖石に関してはSB2-1の構築で削平を受けているため、不明である。かまどを住居の山側の壁中央部に築くことは、東広島市内の諸遺跡⁽³⁾でも確認できる形態である。かまどの住居内の位置決定に当たっては、川高2号遺跡SB2のように斜面に立地する住居としては、斜面の向きが主要な決定要素になったのであろう。

当地域において、古墳時代の集落跡の調査は、川高遺跡⁽⁴⁾がある。川高遺跡は川高2号遺跡のすぐ南にある遺跡で、同じ谷間の北西斜面に立地し、6世紀前半代の竪穴住居跡1軒と溝1条が確認されている。須恵器は出土していない。川高2号遺跡の竪穴住居跡は7世紀前半の時期なので、川高遺跡のほうが古い時期になる。また、この地域の後期古墳のうち、遺跡に一番近い古墳は南東約300mにある平原古墳群(位置は第2図)⁽⁵⁾である。径10m・高さ2mほどの3基の円墳で、埋葬施設は横穴式石室であるが、築造時期や内容は判明していない。近辺の後期古墳の内、すでに調査されている丁田南3号古墳⁽⁶⁾は円墳・横穴式石室で、7世紀前半の築造とされている。また、福富中学校裏古墳⁽⁷⁾は円墳・横穴式石室で、時期は6世紀後半から7世紀の初頭と報告されている。こうした状況からみると、平原古墳群もその築造時期は6世紀後半から7世紀前半の時期にあたる。川高2号遺跡と平原古墳群は時期が重なり、集落と墳墓が同一集団であった可能性もある。谷河内川東側の丘陵斜面は、川高遺跡や川高2号遺跡が存在するように、居住地を選びながら断続的に営まれた集落地であったことが推定できる。

川高2号遺跡は古墳時代後期の集落の一部を示していると考えられるが、今回、造り付けかまどのある竪穴住居跡など、その様相の一端を明らかにすることができた。

註

- (1) 田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981年
- (2) 註(1)に同じ。
- (3) たとえば、浄福寺2号遺跡（東広島市高屋町高屋堀）、小谷黄幡遺跡（東広島市高屋町小谷）、志村遺跡（東広島市高屋町小谷）、貞付谷遺跡（東広島市西条町寺家）、助平3号遺跡（東広島市西条町御藪宇）、柳原遺跡（東広島市高屋町小谷）などがある。
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群Ⅱ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第75集 1993年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「小谷黄幡遺跡」・「志村遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅷ）』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第98集 1992年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「貞付谷遺跡」『金平山遺跡・貞付谷遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第99集 1992年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「助平3号遺跡の調査」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅱ）』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第114集 1993年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「柳原遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅸ）』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第115集 1993年
- (4) 財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室『川高遺跡』財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第7集 2004年
- (5) 註(4)に同じ。
- (6) 福富町教育委員会『丁田南第3号古墳』福富町教育委員会文化財調査報告書第1集 1994年
- (7) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『福富中学校裏古墳発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第192集 2001年



a 調査前遺跡遠景 (南西から)



b 調査後遺跡遠景 (空中写真, 北から)



a 調査後遺跡遠景（空中写真，北西から）



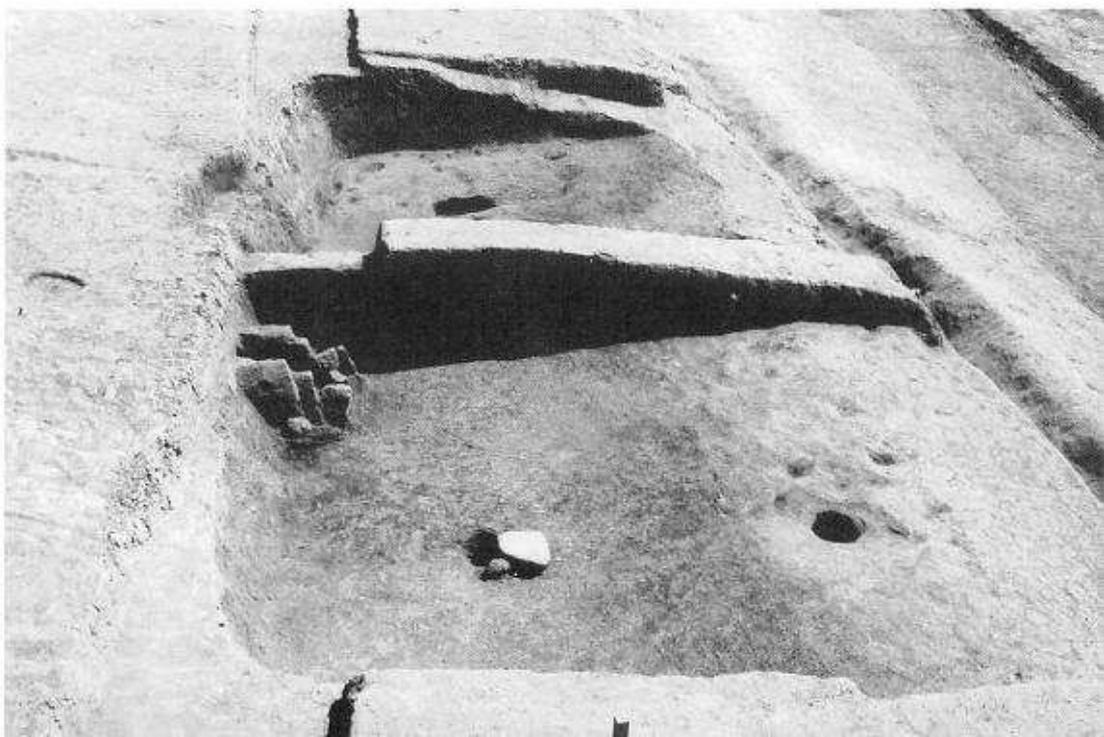
b 調査後遺跡遠景（空中写真，西から）



a SB.1 完掘状況
(南から)



b SB.1 完掘状況
(南西から)



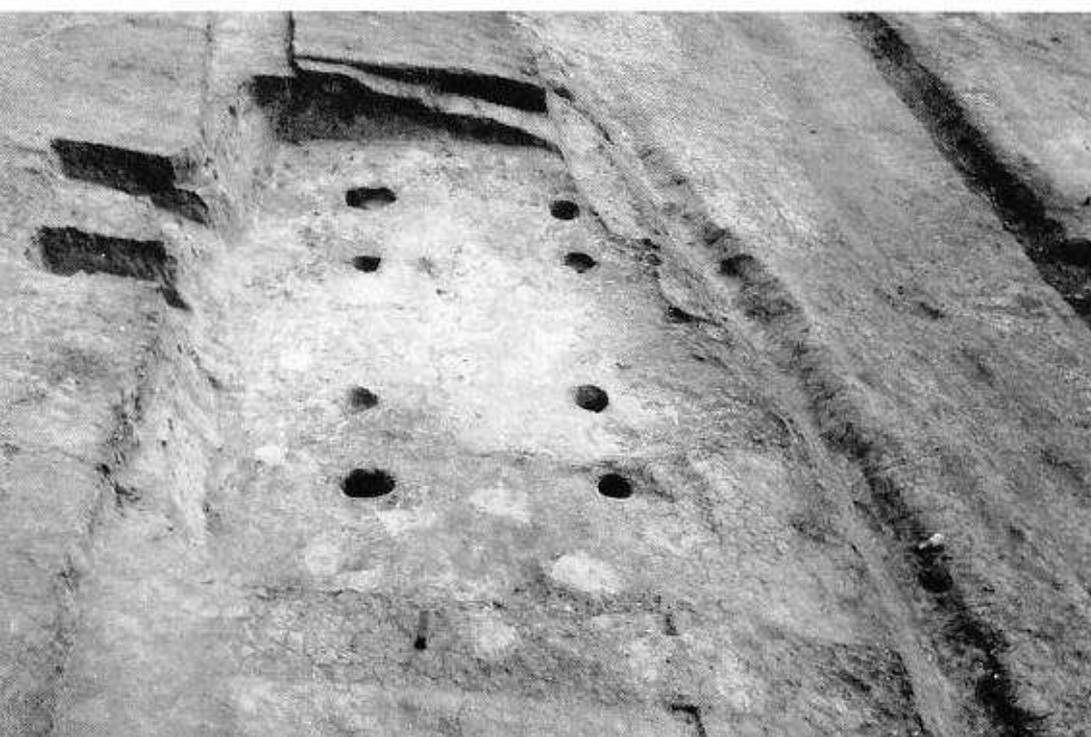
c SB.2 かまど遠景
(北から)



a SB 2 遺物出土状況
(南東から)



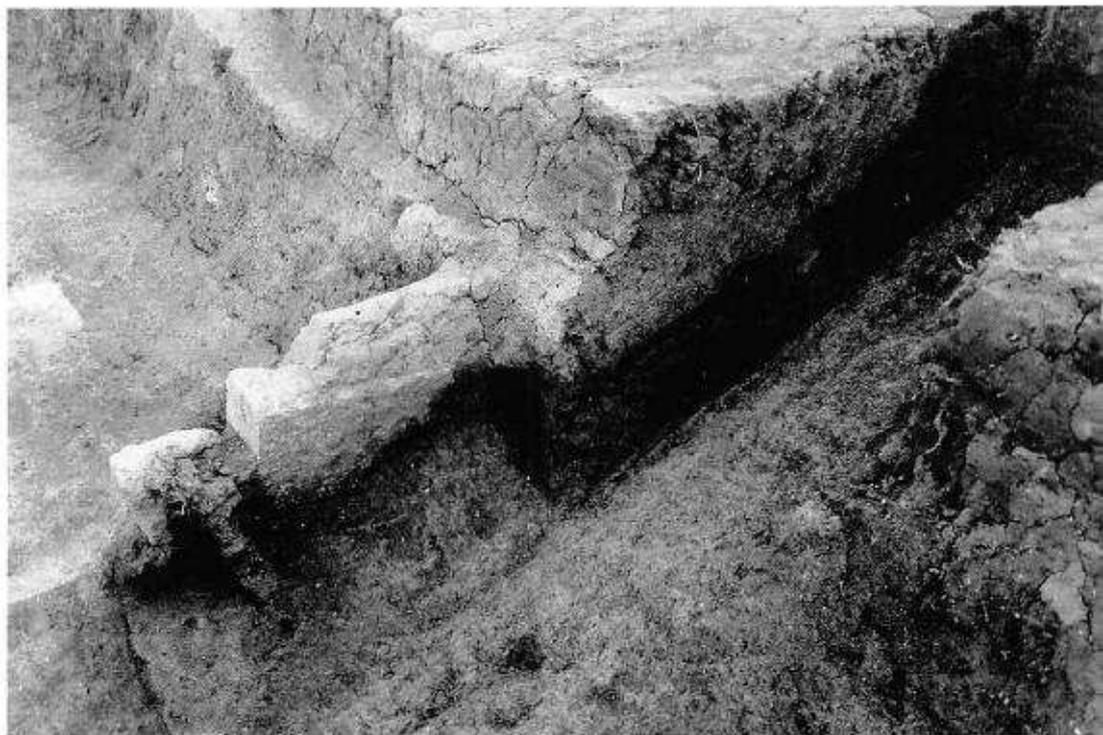
b SB 2 完掘状況
(西から)



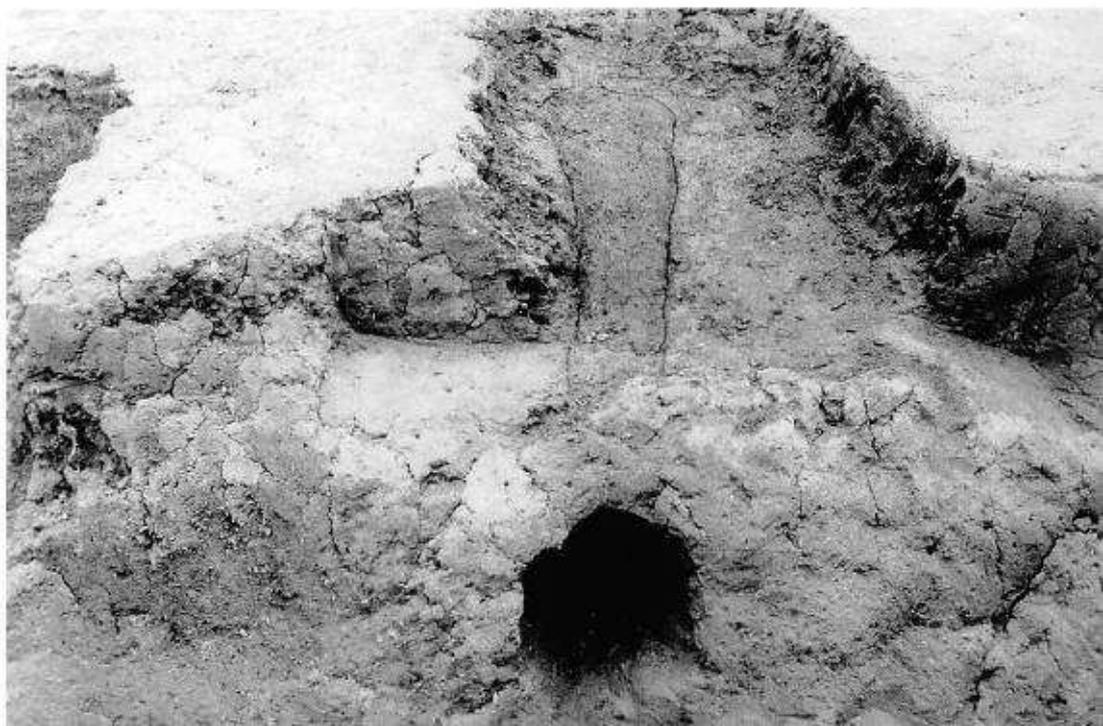
c SB 2 完掘状況
(北西から)



a SB 2-1 かまど近景
(西から)



b SB 2-1 かまど
断面状況 (南西から)



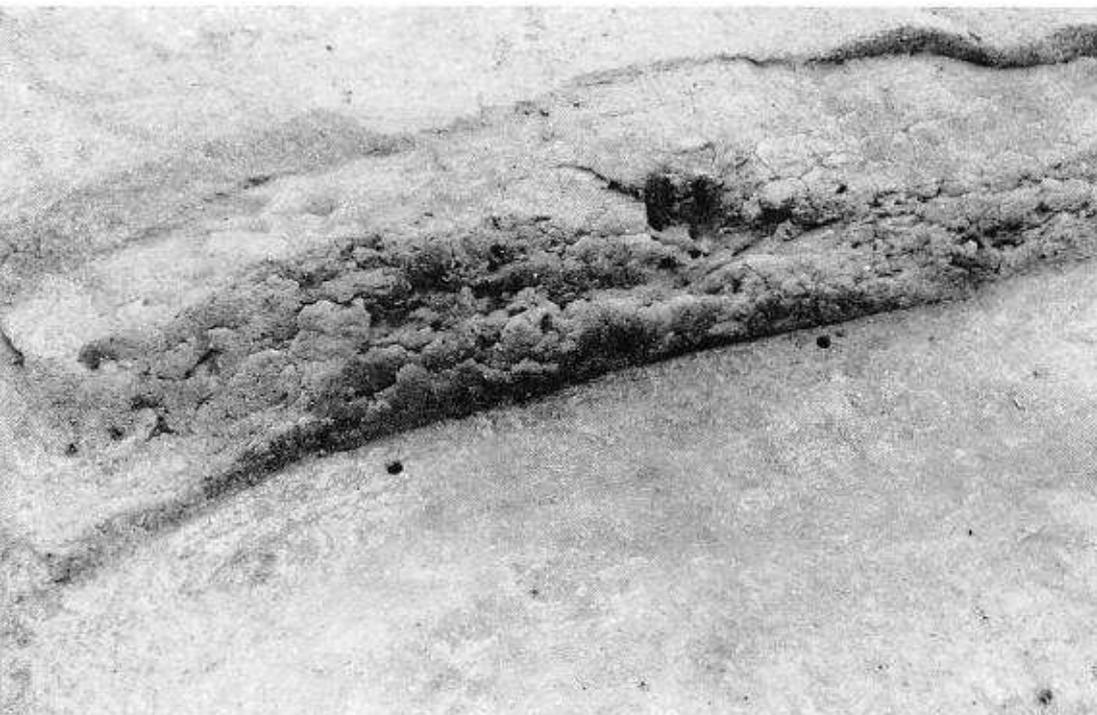
c SB 2-2 かまど近景
(西から)



a SB2-2かまど
断面状況(南西から)



b SB3近景(北西から)



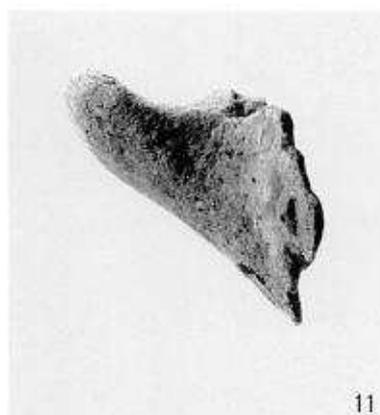
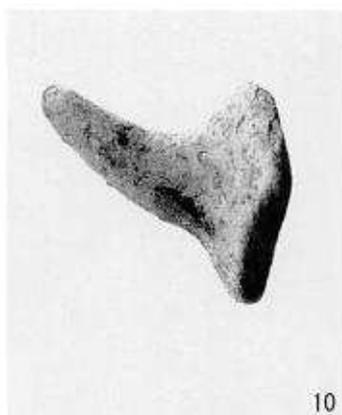
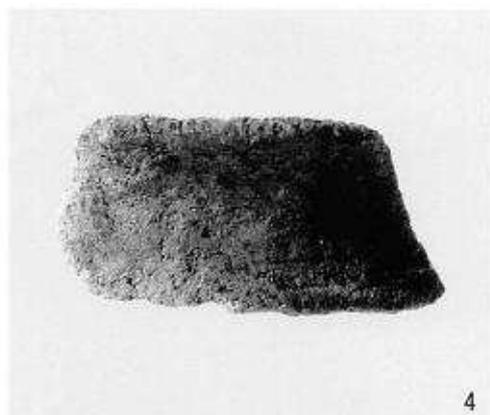
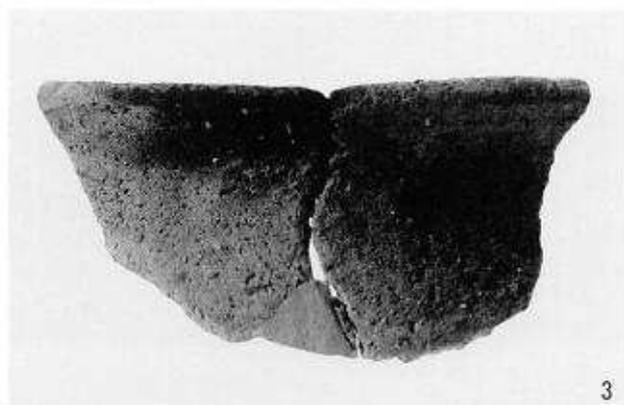
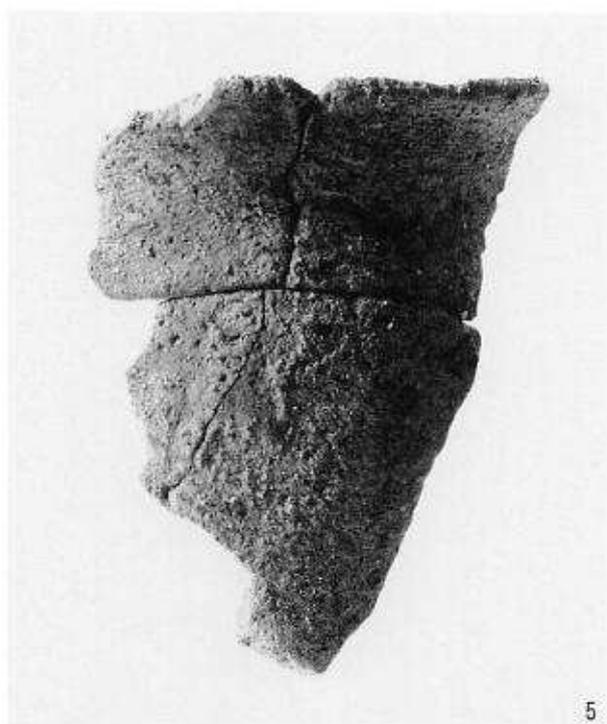
c SB4近景(北西から)



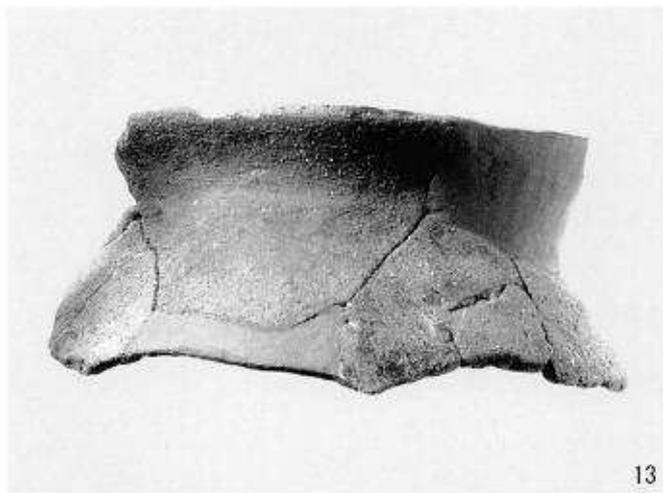
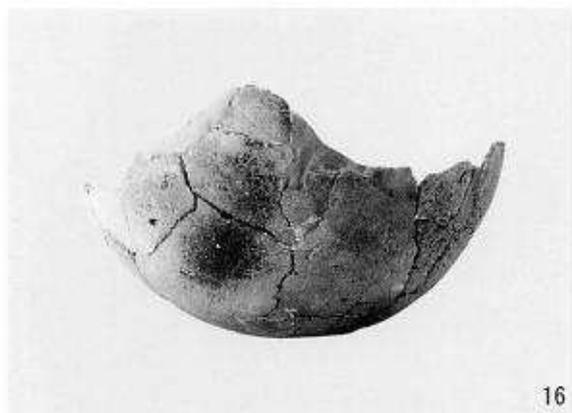
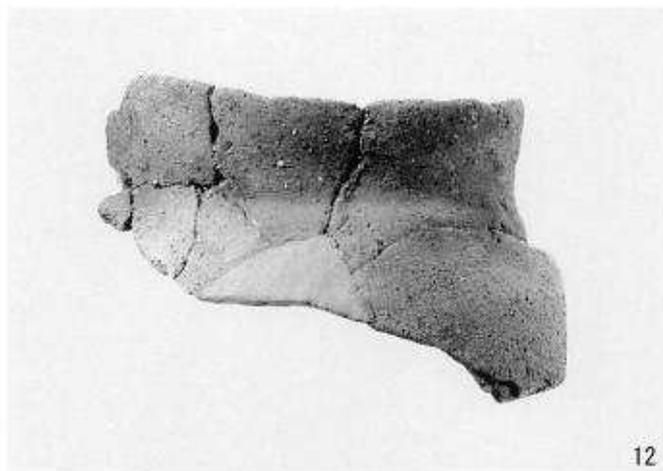
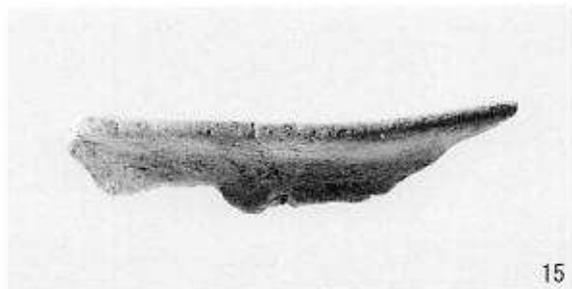
a SD4 近景 (西から)



b SK1 近景 (南西から)



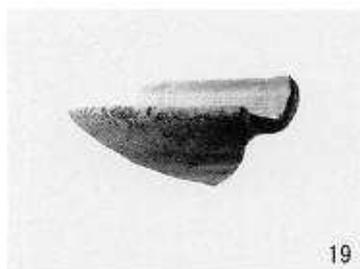
出土遺物 1



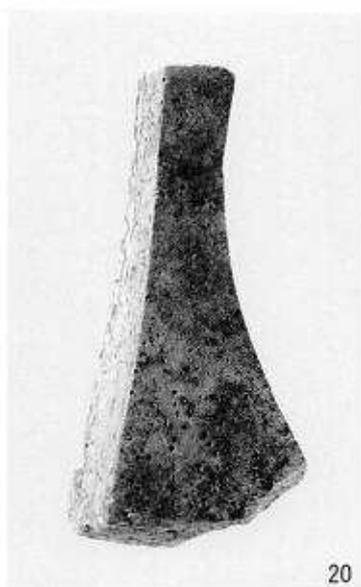
出土遺物 2



18



19



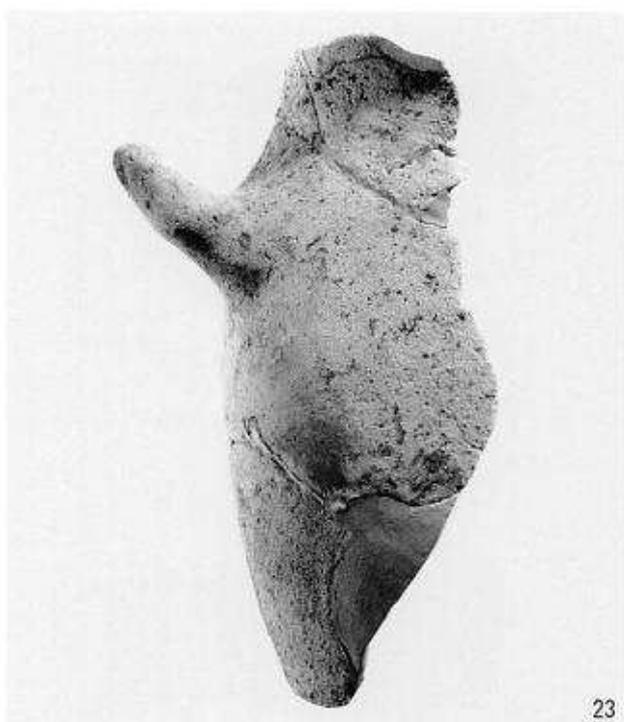
20



21



22



23

出土遺物 3

報告書抄録

ふりがな	かわたかにごういせき							
書名	川高2号遺跡							
副書名	沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	4							
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	岩本正二，山田繁樹							
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL 082-295-5751							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
かわたか 川高2号遺跡	ひろしま 広島県 ひろしまし 東広島市福富 らふ 町 くさ 大字久芳	34405	117	34° 31' 48"	132° 46' 43"	20040621 ～ 20040730	1,006	沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
川高2号遺跡	集落	古墳時代	竪穴住居跡4軒， 溝4条，土坑1基， その他の遺構（穴） 6個	土師器，須恵器，砥石		造り付けかまどがある竪穴住居跡（7世紀前半）		

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第9集

川高2号遺跡

沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

発行日 平成17（2005）年3月31日

編集 財団法人広島県教育事業団事務局
埋蔵文化財調査室

〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号
TEL (082)295-5751 FAX (082)291-3951
ホームページ <http://hmaibun.d-net.co.jp>

発行 財団法人広島県教育事業団

〒730-0011 広島市中区基町4番1号
TEL (082)228-8451 FAX (082)228-8441

印刷所 至誠堂印刷株式会社